川上 高司 ブログ アーカイヴ

2016年

1月1日

シリアの年

2015 年は、シリア問題で世界が大きく揺れた年だった。ISIS の台頭でイラク、シリア情勢が悪化、シリア国民は難民となって国外脱出を図った。その行き先は主にヨーロッパで、特に9月に3才の幼児の遺体がエーゲ海の海岸で発見されると一気に国際問題となった。

だがあまりのその数の多さに第 2 次世界大戦以後最大の難民危機と言われるようになり、ヨーロッパ各国は混乱に陥った。

難民たちはドイツやスエーデンを目指したが、その経由国であるハンガリーは早々に国境を封鎖し難民をシャットアウトして自衛に走った。だが難民は別のルートを作るだけでその勢いはさらに増し、ドイツのメルケル首相が難民受け入れを表明したためさらに混乱を招いた。

オーストリアも国境を制限、デンマークはそもそも難民受け入れに消極的というようにヨーロッパ各国の対応がばらばらだった。シュンゲン協定により EU 域内の国境は開放されて往来が自由なはずであったが、各国が国境を封鎖するにつれてその理想も揺らいだ。それでもドイツとスエーデンは人道的見地から難民の受け入れに積極的だった。

しかし終わりのない難民の流入と 11 月に起こったパリ同時多発テロの影響で、スエーデンが政策を一転させる。スエーデンからノルウエーやフィンランドへ抜ける国境はすでに封鎖されていたが、デンマークからの難民を制限し、ともするとデンマークへ送り返すという強硬策に転換したのである。

ョーロッパの中でも人道支援に手厚い国との評判が高いスエーデンのこの転換は ますますョーロッパの亀裂を明確にし、ドイツの孤立が際立ってしまった。ドイツも もはやこれまでのように難民に寛容ではいられないだろう。

2016 年はシリア難民にとっては厳しい年になりそうである。それでも彼らはシリアを出たことを後悔していない。それほどに祖国は荒れているのだ。今月末にはいよいよシリア政府と反政府勢力が交渉のテーブルに着く和平会議が開かれる予定だ。一刻も早いシリアの政治的安定こそが難民危機の解決策であることは論を待たない。米露だけでなく、ヨーロッパ、トルコや湾岸諸国など世界が取り組むべき最優先課題だ。2016年が「シリアの年」と言えるようにアメリカの外交政策に期待したい。

1月6日

一寸先は闇の世界情勢

新年早々不穏な動きが世界を覆った。サウジアラビアでは4人のシーア派と45人

のアルカイダのメンバーの死刑を執行、同国で 1980 年以来の大規模な刑の執行となった。だが、この 4 人のシーア派には同国内のシーア派の間でも人望の厚い聖職者のシェイキ・ニムル師が含まれていたことから、イランやイラク、レバノンでシーア派の反発を引き起こした。イランではテヘランのサウジ大使館が襲撃され、イラクでは1990 年以来閉鎖されていたサウジ大使館が新年早々に再開したものの再び閉鎖された。

イラクのシーア派有力者のサドル師はサウジへの抵抗を呼びかけ、レバノンのヒズボラも「ニムル師の死刑は状況を悪化させる」と不穏な予告を発した。

一方でサウジアラビアはイランとの国交を断絶、バーレーンやスーダンなど一部 のスンニ派国家も同調したため、スンニ派とシーア派間の緊張が高まっている。

最も不安にかられているのは実はアメリカである。昨年末にシリア和平会議にイランとサウジアラビアの同席を実現しシリア内戦終結へ向けて前進したのもつかの間、 今回の件でイランとサウジアラビアの関係が悪化、今月末に予定されているシリア和平会議が最悪の場合は決裂しシリアの和平が遠のくではないかと危惧している。

アメリカや周辺国との関係を悪化させてまでサウジアラビアはなぜ刑を執行したのか。それはサウジの国内事情も大きく作用している。サウジアラビアは原油価格の下落で財政が悪化している。アラブの春の時には、潤沢な資金で交付金を国民にばらまいて民主化運動を押さえ込んだ。その潤沢な資金が今では枯渇し今後は逆に国民には厳しい政策を採れば国民の不満は一気に高まる。そこに過激派がつけ込んで国内政治を揺さぶる可能性は十分すぎるほど高い。今回の刑の執行でサウジの中での過激派の活動への弾圧と警告を知らしめる目的があったことは容易に推測がつく。

一方のシーア派二ドル師は、2012 年のアラブの春の時にサウジ国内で民主化を求めて王政に反対を主張した穏健な人物である。彼を中心に再び民主化運動が盛り上がると、イランが支持を表明していただけに、サウジ政府としてはイランの影響力が国内で強まることは見逃せない事態である。

さらに昨年アメリカとイランが核問題で合意し宥和路線を両国が歩み、さらにシリア問題でもイランの影響力が強くなりつつあることにもサウジ政府は不満を持っていた。アメリカの顔色をうかがう気持ちはもはや現国王にはないのかもしれない。

サウジアラビアにとってイランを始めとするシーア派の反発もアメリカの危惧も 予測の範囲内だろう。それでも強硬路線を採る新国王とどう渡り合うのか、オバマ外 交にとってまたひとつ大きな課題が現れた。

1月28日

大統領選挙いよいよ本格化

共和党はドナルド・トランプが相変わらず独走状態で、本当にトランプ大統領が誕生するかもしれないという期待と恐怖がアメリカを覆っているようだ。その恐怖についてアメリカ政界の重鎮、ロバート・ゲイツが 1月25日の米誌「Politico」のイベントにトム・ドニロンとともに参加し厳しく批判した。ゲイツはニクソン大統領の下で政界入りして以来、8人の大統領に仕えた。8人目は党を超えて民主党のオバマ大統領のたっての頼みで国防長官に留任し国務長官だったヒラリー・クリントンと共に活躍した。ゲイツはもしトランプが大統領になったら自分はさっさとカナダへ移住す

るとまで宣言した。

そのゲイツがトランプのみならず、2016 年大統領選挙の候補者、とりわけ共和党 候補者について辛辣な持論を展開した。まず、共和党候補者はみな揃って国家安全保 障については「お子様レベル」とバッサリ切ってすてる。トランプの「イスラム国の リクルートを阻止するためにインターネットの閲覧制限」やテッド・クルーズの「イ スラム国を絨毯爆撃」、クリスティーンの「大統領専用機を南沙諸島に飛ばす」など といった発言は場当たり的で非現実的、そもそも憲法違反だという。ジェブ・ブッシュに至ってはこのようなあり得ない放言について「何ら反論できない」ほどレベルが 低いと手厳しいが、父ブッシュ、兄ブッシュに仕えたゲイツにすれば、ジェブには絶 望したの一言なのであろう。

そのゲイツが、民主党のクリントンは絶賛する。リビアへの空爆の是非については意見が対立したもののクリントンはタフな精神の持ち主で常識を共有できると評価する。確かにゲイツ国防長官とクリントン国務長官の関係はうまくいっていった。アメリカでは国防長官と国務長官が外交での主導権争いを展開するこため、両者の仲は険悪であることが普通だったが、ゲイツとクリントンは違った。ゲイツは常に国務長官の後ろに控えて外交を優先させた。後任のヘーゲル国防長官も、現カーター国防長官もケリー国務長官の後ろに控え、ケリー外交を下から支えた。アメリカの外交政策の主導権を国務長官の手に戻したゲイツの功績は大きい。

ニューヨーク市長を務めた実業家のマイケル・ブルームバーグが独立系で立候補するとの噂がかけめぐっている。もし本気で立候補すれば、知名度と資金ではクリントンにも負けない。実績と経験では他の追従を許さないクリントンにどこまで共和党や独立系が奮闘できるか、アメリカ大統領選挙は国際社会にも影響を与えるので世界中が見守るに違いない。

1月29日

シリア和平会議始まる

1月29日、シリア和平会議が始まる。シリア政府と反政府側が参加することで注目されていたが、反政府側からだれが参加するのかで意見がまとまらないでいた。また、1月に入ってからのイランとサウジアラビアの関係悪化も加わって開催が危ぶまれていたが、「とにかく始める」というケリー国務長官の強い意志で開催にこぎつけた。

だが、クルド人グループは参加が見送られ、また反政府側とアサド大統領は同じテーブルにつかないという。彼らはそれぞれ別の部屋に待機し、外交官がそれぞれの部屋を行き来して交渉するというスタイルに落ち着くようである。それでもジュネーブIIまでの反省に立ち、会議を6か月は継続すること、NGOや女性のグループ、アドバイサーなども参加して議題も2つに絞る。第1に、新政府、新憲法、選挙など新しい政治システムについて話し合う。第2に、人道支援である。最優先すべきことは停戦の合意である。この2つに絞ってシリア和平会議は話合いが行われる。

開催にあたっては各国の思惑が絡んでいた。サウジアラビアは反政府側の代表は支援している「交渉委員会」から出すことにこだわり、希望を通した。ロシアもあるNGOの参加を求めた。アメリカは反政府グループに対しアサドの退陣という条件なしで出席と厳しい要求をのませた。

会議そのもは各国の妥協の産物でいびつだがそれでも、アメリカとロシア、サウジアラビアとイラン、アサド大統領と反政府グループが交渉を始める。「これから数ヶ月でだれが本気でだれが本気でないかがわかる」とケリー長官は期待を込める。「停戦しなければならないとみんなが思っていると信じている」。

話せばわかるというケリーの熱い外交が始まる。